

『忘却の河』

福永武彦著／新潮文庫

忘却の河は、一人の人物と、その二人の娘、妻、娘の知り合いの男性、それぞれの独白で綴られる、七編連作の一人称小説の形の長編小説である。その一つ一つが、独立した中編として完成した作品として読むことができるし、事実、一編ずつ独立に発表されている。

この作品は、もう40年以上前に書かれたもので、戦争の余韻がまだ実感を持って残っていた時代を背景とした物語だが、そこに現れる主題は、今の世代と何も変わるところはない。

登場人物たちは、妻が治癒の見込みのない病で寝たきりになってはいるものの、特段の大きな悲劇の渦中にいるわけではない。それでも、一人一人が、それぞれの想い、それぞれの後悔の中で、人に言えない悩みを抱え、苦悩し続けている。人の心は、外からは見えない。そして、外からは見えないがゆえに、すれ違い思い悩むことになる。この作品は、一章ごとに語り手が替わり、それぞれの目にお互いがどう映っているかが語られることで、一人一人の苦悩が多面的に示されることになる。

「人が人を好きになる。それから嫌いになる。あるいは好きでも嫌いでもなくなる。それなら、なぜ人は人を好きになるのだろう。」

これは、恋愛に悩む下の娘の言葉だが、彼女の一番の不安は恋愛ではなく、自分が父親の娘ではないかもしれないということだ。彼女は母親のことは好きだが、父親にはどうしても距離を感じてしまう。

父と母が好きあって結婚したのだとしても、今は好きでも嫌いでもないようにしか見えない。だとしたら、母はなぜ、私を産んだのだろう。彼女が母親に、なぜ自分を産んだのか尋ねる前に、母親は病気で亡くなってしまう。

父親は、結婚前に自分の不誠実のために、恋人と連絡が取れなくなり、とにかく謝るために実家を訪ねて行き、彼女が自分の子供を身籠もったまま、自殺したことを彼女の老母から聞かされる。老母は訪ねてきた自分が誰であるかも訊こう

としなかった。

そうして、謝ることも許されることもできないまま、忘れることもできずに生きている。また、長患いの末に妻を死なせたことで、妻に対しても自分が不誠実だったことにまた許されざる罪を感じる。

忘却の河、とはギリシャ神話の冥界を流れる川、レーテー Letheのことで、死者がこの川の水を飲むことで現世のことを全て忘れると言われている。レーテーは、彼岸と此岸を隔てる川ではないが、賽ノ河原、三途の川と重なる部分を持つ。許されない罪にとって、忘却は唯一の救いとなる。

人は忘れることもできないまま、誰かをずっと愛し続けることができるのだろうか。

なぜ、小説を読むのか。それは、自分ではない人物の人生、経験を、追体験するためだと思う。人間は、その経験によって作られるし、自分の経験を元にしてしか、あらゆることの判断ができないものだ。少しでも、よい判断をするためには、より多くの経験が必要だけれど、一人の人間の一生は、一回限りだし、経験できることの総量にも限りがある。小説は、人の目に、様々な人生のあり方があることを教えるためにあるのだと思う。

福永武彦は、フランス語で言うロマンシェであり、ロマンスを書く人、愛の作家と呼ばれている。しかし、彼の書く物語は、甘く幸せな恋愛小説ではない。人を愛するがゆえに、深く傷つき、しかし、それを誰にも告げられぬまま、その痛みと共に生きるしかない、そういう生き方が描かれる。福永武彦の描く愛は、ひどく純度の高い、愛である。

執筆者紹介

高原 美規

生物系准教授。専門領域は、植物バイオテクノロジー。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『忘却の河』 福永武彦著 新潮社（新潮文庫） 2007年 540円

[ブックガイド目次へ](#)